

明夫の指が再び秘唇をとらえると、そこはさらにおびただしく濡れていた。

「熱くなってる、やよいの」

「明夫のだって」

射精したばかりにもかかわらずはち切れそうに脈打つものを、やよいは握り、やるせなくしごきたてた。

「これ、ちょうだい。あたしに入れて」

やよいは脚を開き、握ったものを自らの中心に導いた。

「うん」

明夫は腰を進めた。丸い先端が濡れた秘唇をかき分け、温かくヌメった谷間に呑みこまれる。

「あ、来る——」

やよいはのけ反った。

逞しい牡莖は一気に少女の膺を貫き、ふたりをしっかりと繋げた。

「入ってる、明夫のが」

「うん。奥まで」

以前あったような違和感はほとんどなかった。妙にしっくりくる。ただ挿入された

だけで豊かな気分になれた。

明夫が抽送をはじめると、やよいは悩ましい声をあげて身を震わせた。

「もう感じるようになったんだ。やっぱりけっこう経験があったんじゃないの？」

「違うわ。明夫とだから嬉しくて、ここが気持ちいいの」

そう言つて、やよいは胸に手のひらを当てた。

火照つた身体から汗が滲む。息を弾ませ、ふたりは腰を絡ませ合つた。ペニスと膣壁がこすれる。ふたり分の体液を攪拌かくはんさせるそこからは、いやらしく湿つた音がこぼれた。それが妙に、人間らしい繋がりを感じさせた。

「気持ちいい？ 明夫」

「うん。すごくいいよ。なんだかもイッチャいそうだ」

懸命に腰を振る少年は健気けんげで、やよいは愛いとしさに涙ぐみそうになった。

「このままイッチてもだいじょうぶなのかな」

「うん、ちようだい。明夫の全部がほしいの」

やよいは迎え入れやすいように、腰の角度を上向きにした。より深く挟られ、彼女自身も快さがひろがった。

明夫の動きが速まる。ぶつかり合う股間がばつばつと音をたてるほどの激しさ。



「イクよ、やよい」

「いいよ。いっぱい出して」

「うう、あああッ、イク——」

明夫の体が痙攣した。打ちこんだペニスを絶頂の悦びに脈打たせ、生命のエキスを少女のなかに注ぎこむ。

ほとばしりを浴び、やよいは文字どおり洗礼を受けたような敬虔な心境になった。三回目のセックス。でも、これが初体験だと思った。本当に心から結ばれたのは、今が初めてなのだから。

ぐったりと体をあずけてきた明夫を抱きしめ、やよいは無上の喜びに包まれていた。長い道のりを抜け、ようやく辿りつけた。狭き門から入れという聞きかじった言葉を思いだす。天国への扉が、たった今開かれたのだ。

愛しい少年の汗ばんだ背中を撫でながら、やよいはこの幸福が永遠につづくことを願った。